

隨泉寺寺報

2001 年 9 月号
第 373 号

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季彼岸会法座

講師 妙行寺住職 永野正英師

講題 「わたしの浄土真宗」

炎天を あるくどこかで 力抜き (中川 浩文)
今年近年にない熱い夏でした。宮原の国道 2 号線にある温度計で 39 度を指していた日がありました。炎天下でアスファルトの照り返しもあると思いますが、あまりの温度の高さに思わずめまいを感じる思いでした。日差しの中を歩いて行こうと思うと、思わず肩に力が入っていました。厳しい自然に立ち向かう時はどこかで力が入っているようです。お盆はそんな意味でふるさとに帰って、懐かしい人達と会って、少し肩の力を抜いて、すこしゆっくりして、こころの休憩をする時なのかもしれません。さあ 9 月はお彼岸です。暑さ寒さも彼岸までとか、少し暑さも和らいできて、しのぎやすくなってきました。
食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋、睡眠の秋、秋は何にでも合うような気がします。それだけ何をしていてもみやすい時期、好季節ということでしょうか。だからこそ、何をしていてもよい季節だからこそ、仏道修行しなさいと聖徳太子はお勧めになったのでしょうか。

9 月の法座予定

9 月 14 日 昼席 午後 1 時より……彼岸会法座・前々坊守十三回忌法要
9 月 14 日 夜席 午後 8 時より……出張法座
9 月 14 日 昼席 午前 10 時より……彼岸会法座・主婦の集い
9 月 15 日 昼席 午後 1 時より……彼岸会法座

お知らせ

《前々坊守 法樹院釋幸子法尼 十三回忌法要》

9 月 14 日 金 午後 1 時より 前々坊守 法樹院釋幸子の
十三回忌の法要を勤めます。平成元年 9 月 23 日に八十七歳でお浄土に還歸されました。とてもやさしい、いいおばあちゃんでした。私が知っているのは 10 年足らずの事ですが、話を聞くととても苦労をされた人だなあと感じます。昭和 18 年 5 月の前々住職の突然の死から昭和 30 年の前住職の入寺まで、戦中戦後の一番物の無い時代に、この隨泉寺をまもりぬかれたのだから……。
今思い出すと一番記憶にあるのが、私が隨泉寺に入寺して初めての秋の彼岸のことです。その時はちょうど布野のお寺にお説教を頼まれて出講していました。9 月の 23 日にそれが終わってお寺に帰って来ました。ちょうど夕方 6 時ぐらいだったと思います。おばあちゃんは境内の向こうにある畑におられました。車から降りて『帰りました』と言うとおばあちゃんは『良いところに帰ってこられました。あそこを見てみなさい。夕日がとってもきれいでしょ。』と西の方を指さされました。今まさに西の山へ落ちようとしているところでした。お彼岸の中日は太陽は真東から昇り、真西に落ちます。西の空は真っ赤に染まり、絵に描いたようにきれいでした。しばらく二人で見とれていましたが『お浄土はあの向こうにあるのですよ。』と手を合わせておられました。それはあの美しい夕日の向こうには素晴らしい世界がきっとあるに違いないということをお教わりのような景色でした。
平成元年 9 月 23 日お彼岸の中日、おばあちゃんはお浄土に還られました。

主婦の集い(9 月 15 日)

主婦の集いを開催します。毎年婦人部の行事で行なわれていたのですが工事の為 2 年間お休みしていました。秋の一番気候の良い時、それぞれ忙しい事もあると思いますが、一番大切なことのために時間をあけてみましょう。

ありがとうございます。

特別懇志	一金 弍十万円也	大勝院釋利華	平原 利幸様
特別永代経	一金 十万円也	平原 鍊一様	
特別永代経	一金 五万円也	馬場 孝 様	
門信徒会へ	一金 五万円也	平原 鍊一様	
門信徒会へ	一金 五万円也	馬場 孝 様	